

## 163B.附子理中湯

参考文献名		人 参	附 子	乾 姜	甘 草	白 朮	蒼 朮	朮	生 姜	乾 生 姜	大 棗	党 参	用法・用量
漢方診療医医典	注1	3	0.5 ～1	3	3			3					
漢方処方応用の実際	注2	3	0.5	3	3			3			3		
臨床応用漢方処方解説	注3	3	○	2～ 3	3			3					
新版漢方医学	注4	3	0.5	3	3			3					
症候による漢方治療の実際	注5	3	0.6	3	3			3					
経験・漢方処方分量集		3	1	3	3			3					
改訂新版漢方処方分量集	注6	3	1	3	3			3					
現代漢方入門	注7	—	—	—	—			—					*1
成人病の漢方療法	注8	3	1	3	2			3					
漢方の診かた治しかた	注9	3	1	2	2			3					*2
1000万人の漢方診断と治療の実際	注10		1										*3

\*1 人參湯+附子0.5

\*2 人參湯+附子1

\*3 人參湯+附子1

### 注1

人參湯に附子を加えた方で、人參湯証で、手足厥冷、惡寒、脈微弱のものに用いる。

(人參湯証：胃腸が虛弱で、血色すぐれず、顔に生氣がなく、舌は湿潤して苔がなく、尿は稀薄で量が多く、手足は冷えやすい。また唾液もうすくて口にたまり、大便は軟らかく、下痢しやすい。また、嘔吐、めまい、頭重、胃痛を訴えることもある。脈は遅弱、弦細のものが多い。)

### 注2

(目標)人參湯の用い方・目標に準じ、更に一層からだや手足の冷えが甚だしく、四肢が痛んだり、尿がことに近くて、脈が沈遅のもの。(不眠があり、精神不安を呈し、神経過敏になったものに用いている。)

(応用)人參湯に準じるほか、神経性心気症、不安神経症などのノイローゼに用いられる。

### 注3

人參湯に附子を加えて附子理中湯という。人參湯の証で手足の冷え甚だしく、惡寒し、脈微弱のものに用いる。

### 注4

神経症(ノイローゼ)

冷え症で、血色わるく、腹に力がなく、脈も沈んで弱く、全体に活気がなく、不安、めまいなどのあるものによい。

### 注5

・新陳代謝の衰えている時に、これを盛んにする効があり、下痢をとめる効もあるが、またこれを用いて便通をつけることもある。

・人參湯証では胃からくる症状、例えば食欲不振、嘔吐、噯氣などがみられ、また、胃痛、疼痛などを伴うことがある。更に一段と新陳代謝が衰え、惡寒、手足厥冷、冷汗などのあるものに用いる。

・消化器に障害があって冷えるものに用いる。

### 注6

冷えから来た下痢、四肢冷

### 注7

冷えから来た下痢、四肢厥冷症

### 注8

新陳代謝の極度に衰えた無力体質で、血色が悪くて生氣に乏しく、手足の冷える常習性便秘の治療はなかなかみづかしく、普通の下剤を用いても何ら効果がない。こういう場合に本方を用いると、すらすらと便通がつく。(腸管の運動を鼓舞)

### 注9

冷えからきた下痢、四肢厥冷症

注10

・胃アトニー

・顔色蒼白、胃に熱感、もたれ、ガスが充満、肩こり、腰痛、脚が冷える、脈が遅弱で舌は白苔

・常習性便秘

・新陳代謝の極度に衰えた無力体質で、血色が悪くて生気に乏しく、手足の冷える常習性便秘の治療はなかなかむずかしく、普通の下痢を用いても何ら効果がない。こういう場合に本方を用いるとすらすらと便通がつく。腸管の運動を鼓舞し促進させる。

・冷えからきた下痢、四肢厥冷症

処方番号：164

処方名：人參養榮湯（にんじんようえいとう）

**処方構成：**

人參 3、当歸 4、芍薬 2-4、地黄 4、白朮 4（蒼朮も可）、茯苓 4、桂枝 2.5、黄耆 1.5-2.5、  
陳皮（橘皮も可）2-2.5、遠志 1.5-2、五味子 1-1.5、甘草 1-1.5

**用法・用量：**

湯

**しばり：**

体力虚弱なものの次の諸症

**効能・効果：**

病後・術後などの体力低下、疲労倦怠、食欲不振、ねあせ、手足の冷え、貧血

原典：太平惠民和劑局方

出典：

**解説：**

十全大補湯の去加方で、同方から川芎を去って、代りに五味子、陳皮、遠志の3味を加えたもの。すなわち古方の帰耆建中湯、苓桂朮甘湯、苓桂五味甘草湯、人參湯と後世方の四物湯、四君子湯を合方し、陳皮、遠志を加味した方意であるから、皮下、気管および胃腸管の停水はなはだしく、これら水毒のために、気血ともに虚したもの、虚弱体質や腺病質、病後などで疲労、貧血、衰弱、食欲不振のものに体力を補う剤である。皮膚頭髮の栄養不良で健忘、不眠、嘔吐、ねあせと便秘又は下痢の傾向や息切れ、咳嗽を伴う。胃腸虚弱、胃拡張、病後産後の衰弱、肺結核、腸結核などに応用される。

# 164.人參養榮湯

参考文献名	人 参	当 帰	芍 薬	地 黄	白 朮	朮	茯 苓	桂 枝	黄 耆	陳 皮	遠 志	五 味 子	甘 草	生 姜	用法・用量
診療の実際	0	4	2	4		4	4	2.5	1.5	2	2	1	1		
診療医典	3	4	2	4		4	4	2.5	1.5	2	2	1	1		
処方解説 注1	3	4	4	4		4	4	2.5	2.5	2.5	1.5	1.5	1.5		
後世要方解説 注2	0	0	4	4		4	4	2	1.5	2	1	1	1	1	*1
明解処方 注3	0	4	2	4		4	4	2.5	1.5	2	2	1	1		
基礎と診療 注4	3	4	2	4		4	4	2.5	1.5	2	2	1	1		
入門漢方医学	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		

\*1 生姜1gを加える

〔注1〕 毛髪脱落し、顔色光沢なく枯燥、心悸亢進、不眠、健忘症などを目標にして用いる。病後の衰弱、産後の衰弱、結核症の衰弱などに応用する。

〔注2〕 脾肺共に虚すとして呼吸器消化器共に犯され、加うるに積勞、虚損、陰陽衰弱、五臓氣渇くとして諸病の困ばいの極、津液枯燥し、栄養衰え貧血或は悪液質を呈して、疲労甚だしきものに用いて体力を補う剤である。玄仙は(1)毛髪脱落(2)顔色無沢(3)忽々喜忘(4)只淡不食(5)心悸不眠(6)周身枯澁(7)爪枯筋涸の7証を目標にして用いた。本方は下痢するよりも却って津液枯れて便閉のものに用いてよい。結核の浸湿型のものには余り用いられない。応用 (1)病後衰弱 (2)産後衰弱 (3)結核の枯燥者 (4)遺精による疲労 (5)諸疲労衰弱の者。

〔注3〕 主に肺結核の浸潤期、腸結核などの所謂氣血俱に虚しているときに用いる薬で、十全大補湯証で呼吸器の苦情すなわち喘咳、咯血、呼吸困難などのある場合に用いられる。

〔注4〕 栄養剤、虚弱体質や腺病質で、元氣なく疲労のはげしい人。大病後手術後で体力がなく貧血して衰弱し食欲のない人、とくに熱病や結核で微熱と寒氣があり、からだが衰弱して息切れしやすく痩せて、皮膚の色が悪く、常に食欲がなく、下痢の傾向のある人。

処方番号：165

処方名：排膿散及湯（はいのうさんきゅうとう）

処方構成：

桔梗 4、甘草 3、大棗 3、芍薬 3、生姜 0.5-1（ヒネショウガを使用する場合 2-3）、枳実 3

用法・用量：

湯

しぼり：

体力に関わらず、広く応用できる。

効能・効果：

化膿性皮膚疾患の初期又は軽いもの

原典：吉益東洞

出典：

解説：

排膿散は、①患部および性質が閉鎖性 ②浸潤熱感が強く、排膿困難 ③皮下深部に膿があるものに用いる。排膿湯は、①患部および性質が開放性 ②浸潤熱感少なく、排膿している ③気道や体表に膿がでているものに用いる。煎じ薬で活用するときは、排膿散と排膿湯を合方して、排膿散及湯として用いる。皮膚化膿症・皮膚病・ひょう疽・面疔・齒槽膿漏などに用いる。なお、大塚敬節によると、排膿散の機能は排膿を専らにして、その効が迅速であり、患部が半球状に隆起して硬くなっているのを目標とし、排膿湯とは合さない。排膿湯は排膿散を用いるより前の、まだ著しい隆起が起こらない初期に用いる、として両者の使い分けをしている。

# 165.排膿散及湯

参考文献名	桔梗	甘草	大棗	芍薬	生姜	枳実	用法・用量
改訂新版漢方処方集 注1	4	3	3	3	3	3	
漢方入門講座1 注2	4	3	3	3	2 ひね生姜	2	
漢方医学の基礎と診療 注3	4	3	3	3	3	3	
漢方精選百八方 注4	3	3	6	3	3	3	
明解漢方処方集 注5	4	3	3	3	2	2	*1

\*1 本方は卵黄1個と一緒に服することが排膿散の条文に指示されている。

## 注1

- ・局所症状だけで全身症状なき化膿症
- ・フルンケル、カルブンケル、蓄膿症、中耳炎、乳腺炎、痔漏、潰瘍

## 注2

- ・蓄膿症：局所の訴えだけで他に格別の所見がなく脉も特徴がないものに使う。

## 注3

- ・化膿症の薬。湿疹(くさ、たいどく、吹出物)や腫物(癰、疔、セツ、ヒョウ疽)などの化膿するものの初期に用いると、痛みをとり、膿を散らせる。化膿したものは増悪を防ぎ、早く排泄口があいて排膿する。
- ・フルンケル、カルブンケル、蓄膿症、歯槽膿漏、中耳炎、乳腺炎、痔漏、潰瘍

## 注4

- ・急性化膿性炎症、患部は発赤、腫脹、堅硬で疼痛を伴ない、化膿の兆あるもの。胸腹つかえ膨満感、粘痰や膿血を吐いて急迫するもの。
- ・急性化膿炎症で病勢の強い時期に用いるが、托裏消毒飲と関連して区別を要す。虚証なら内托散がよい。急性実証で病勢強く全身症状のないものが本方の主治。
- ・フルンケル、カルブンケル、リンパ腺炎などの初期に用いる機会が多い。

## 注5

- ・局所(腹部、大腿部が一番多い)に炎症を伴った化膿症、全身的な発熱悪寒なし、内臓的苦情(便秘、季肋部圧痛など)なし。
- ・化膿症が急性のものである。
- ・ヒョウ疽、疔、淋巴腺炎、蓄膿症、喘息、乳腺炎

処方番号：165A

処方名：排膿散（はいのうさん）

**処方構成：**

枳実 3-5、芍薬 3-5、桔梗 1-3、卵黄 1ヶ（卵黄はない場合も可）

**用法・用量：**

（１）散：１回 1.5-4g １日 1-2 回

（２）湯 （卵黄ははぶくのが普通）

生薬を細末とし１回量 2-3g に卵黄を加えて、よく攪拌し白湯にて服す。１日 1-2 回頓服として用いる。排膿散の湯液剤は排膿湯の処方と区別するため排膿散料と称する。

**しぼり：**

体力中等度あるいはそれ以上で、患部が化膿するものの次の諸症

**効能・効果：**

化膿性皮膚疾患の初期又は軽いもの、歯肉炎、扁桃炎

原典：金匱要略

出典：

**解説：**

排膿湯の大棗・生姜・甘草を去り、枳実・芍薬を加えたものが排膿散である。詳しくは 165B の解説を参照。

# 165A.排膿散

参考文献名		枳 実	芍 薬	桔 梗
処方分量集		3分	3分	1分
診療の実際	注1	3分	3分	1分
診療医典	注2	3分	3分	1分
処方解説	注3	5	5	2
応用の実際	注4	3	3	1.5
処方集		10	6	2
金匱要略入門		8	6	2
明解処方		-	-	-

〔注1〕 疼痛を伴う化膿性の腫物で、患部が緊張、堅硬の状態を示すものに用いる。そこで癰、疔、癰、リンパ腺炎、療疽などに用いる機会があり、寒性膿瘍や慢性の腫物には不適なことが多い。

〔注2〕 疼痛をともなう化膿性の腫物で、患部が緊張し、堅硬の状態を示している。すなわち浸潤が強くてなかなか排膿せず、あるいは排膿後、潰瘍になっても周囲の浸潤が強く緊張し、堅硬のものを目標とする。気血の凝滞と炎症浸潤の強いというのが特徴である。

〔注3〕 諸種の化膿性の炎症および腫物で患部が痛み、発赤して腫れたり硬くなって緊張しているもの

〔注4〕 フルンケル、カルブンケル、皮下膿瘍等の化膿症のしこって痛み排膿し難きもの。



処方番号：165B      処方名：排膿湯（はいのうとう）

**処方構成：**

甘草 1.5-3、桔梗 1.5-5、生姜 1（ヒネシヨウガを使用する場合 1-3）、大棗 2.5-6

**用法・用量：**

湯

**しぼり：**

体力中等度あるいはそれ以下で、患部が化膿するものの次の諸症

**効能・効果：**

化膿性皮膚疾患・歯肉炎・扁桃炎の初期又は軽いもの

原典：金匱要略

出典：

**解説：**

排膿散の枳実・芍薬を去り大棗・生姜・甘草を加えたものが排膿湯である。排膿散は疼痛を伴う化膿性の種々の疾患で、患部が緊張していて、硬結状態のものに用いる。排膿湯は既に化膿部位から膿が出て、患部の緊満がとれ軟らかくなっている状態に排膿を促進し、吸収をよくする目的で用いられる。吉益東洞は排膿散と排膿湯を合方して排膿散及湯（はいのうさんきゅうとう）として用いた。

# 165B.排膿湯

参考文献名		甘草	桔梗	生姜	乾生姜	大棗
処方分量集		3	3	3		6
診療の実際		3	3	3		6
診療医典	注1	3	4	3		6
治療の実際	注2	3	3	3		6
処方解説	注3	3	5	-	1	6
応用の実際	注4	1.5	1.5	1.5		6
処方集		2	3	1		2.5
金匱要略入門		2	3	1		3
漢方あれこれ		3	3	3		6
明解処方		-	-	-		-

【注1】 排膿湯は排膿散を用いる前、または排膿散を用いて、大勢のくじけた後に用いる。

【注2】 排膿散を用いる前に、これを使用する機会がある。排膿散では患部が半球状に隆起して硬くなっているのを目標とするが排膿湯は、まだ隆起が起らない初期に用いる。

【注3】 化膿症のきわめて初期、または盛りを過ぎて緩症になり、虚証で熱性の形のもので、とくに開放性の化膿症というのが条件である。

【注4】 化膿性炎症のごく初期で局所の腫脹や緊張が少ない時期。

【注5】 カルブンケル、フルンケル、潰瘍、中耳炎、蓄膿症、痔漏等で痛み劇しきものあるいは腫れて軟くあるいは中央が凹んでいるもの。

処方番号：166

処方名：麦門冬湯（ばくもんどうとう）

処方構成：

麦門冬 8-10、半夏 5、粳米 5-10、大棗 3、人參 2、甘草 2

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度あるいはそれ以下で、たんが切れにくく、ときに強くせきこみ、又は咽頭の乾燥感があるものの次の諸症

効能・効果：

からぜき、気管支炎、気管支ぜんそく、咽頭炎、しわがれ声

原典：金匱要略

出典：

解説：

本方は竹葉石膏湯から竹葉、石膏を除き大棗を加えた処方、少陽病の虚証を帯びたものの気の上逆（古人はくしゃみも咳も「大逆上気」の変形と考えていた）によるけいれん性咳嗽によく、特に妊娠咳でやせ型のものには本方の奏効することが多い。

この方を服して食欲減退するもの、あるいは下痢の傾向のあるもの、もしくは喀痰が多く切れやすいものには、本方を禁忌とする。

# 166.麦門冬湯

参考文献名	麦 門 冬	半 夏	粳 米	大 棗	人 参	甘 草	用法・用量
処方分量集	10	5	5	3	2	2	*
診療の実際 注1	10	5	5	3	2	2	
診療医典 注2	10	5	5	3	2	2	
症候別治療 注3	10	5	5	3	2	2	
処方解説 注4	10	5	5	3	2	2	
後世要方解説	-	-	-	-	-	-	
漢方百話	10	5	5	2～3	2	2	
応用の実際 注5	10	5	5	3	2	2	
明解処方 注6	10	5	5	3	2	2	
実用漢方療法	10	5	5	3	2	2	
漢方あれこれ	10	5	5	3	2	2	
かぜ薬基準	8	5	10	3	2	2	

\* 水500ccをもって煮て300ccとし、日中3回、夜1回に分けて温服する。一般には便宜上3回に分けて飲んでいるが、本法証は夜間に咳嗽症状をみることが多いので、1回は夜服用するがよいと指示したものである。

〔注1〕 気管支炎・肺炎などですでに解熱して後発作性に咳嗽が頻発し、顔面紅潮し喀痰の切れ難いもの、あるいはそのために音声の嘶嘎するものに用い、急・慢性咽喉炎で音声嘶嘎するもの、あるいは喉頭結核・肺結核にも使用することがある。

〔注2〕 咽喉炎、喉頭結核、気管支ぜんそく、百日咳、肺結核、妊娠咳。

〔注3〕 くしゃみ、咳嗽、嘎声。

〔注4〕 少陽病の虚証を帯びたもので、気の上逆による痙攣性咳嗽に用いられる。

急性・慢性気管支炎、喘息、肺炎、急性・慢性咽喉炎、百日咳、嘎声、喉頭結核、肺結核、妊娠中の咳嗽等。

〔注5〕 咽頭炎や喉頭炎で咽喉不利、嘎声のあるもの、感冒、気管支炎、肺炎などで解熱後もなお発作性の咳嗽が続いたり声がかれるもの。

〔注6〕 喉頭結核、肺結核、気管支炎、肺炎の解熱後の咳嗽、百日咳、妊娠咳。

参考：医療手引草に「此方は虚火を下へ導き大逆上気を治するともあり、また火逆上気を治するともあり、兎角潤をして気を下へ行らすと見えたり」とある。

処方番号：166A

処方名：竹葉石膏湯（ちくようせっこうとう）

処方構成：

竹葉 2-4、石膏 5-16、半夏 2.5-8、麦門冬 5-12、人參 2-3、甘草 2、粳米 2-8.5

用法・用量：

湯

しぼり：

体力虚弱で、痰が切れにくく、ときに熱感、強い咳き込み、口が渇くものの次の諸症

効能・効果：

空咳、気管支炎、気管支喘息、口渇、熱中症

原典：傷寒論

出典：

解説：

熱性疾患で大熱が去った後、余熱が残っているもので、体液が枯れ、皮膚が乾燥し、体力が衰え、なお口渇や嘔吐などの症状のあるものに用いられる。臨床では肺炎などの急性熱性疾患の回復期や気管支喘息などに用いられる。また、糖尿病や日射病で口渇のあるものにも用いられる。

なお、竹葉は淡竹（和名：ハチク）の葉を指し、銀翹散に用いられる淡竹葉（和名：ササクサ）とは異なる。

## 166A.竹葉石膏湯

参考文献名		竹葉	石膏	半夏	麥門冬	人參	竹參	炙甘草	甘草	粳米	用法・用量
漢方診療医典	注1	2	10	4	6	3			2	6	
漢方処方応用の実際	注2	2	10	4	6	3			2	6	
臨床応用漢方処方解説	注3	2	10	4	6	3			2	6	*1
傷寒論梗概	注4	1.2	4.8	1.6	3.4	0.8			0.6	2.8	*2
新版漢方医学	注5	2	10	4	6	3			2	6	
症候による漢方治療の実際	注6	2	10	4	6	3			2	6	
漢方と民間薬百科	注7	2	10	4	6	3			2	6	
漢方治療百話	注8	2	10	4	6	3			2	6	
経験・漢方処方分量集		2	10	4	6	3			2	6	
改訂新版漢方処方集	注9	2	16	8	10	2			2	7	*3
漢方入門講座1	注10	2	16	8	12	2			2	8.5	
新撰類聚方	注11	2把 2	1斤 (16)	半升 (5)	1升 (10)	2兩 (成本3兩)		2兩		半升 (7)	*4
漢方薬入門	注12	2	10	4	6	3			2	6	
現代漢方入門	注13	2	10	4	6	3			2	6	
漢方古方要方解説	注14	1.2	4.8	1.6	3.4	0.8			0.6	2.8	*5
新古方薬囊	注15	2	16	5	10	3			2	7	*6
1000万人の漢方診断と治療の実際	注16	2	10	4	6	3			2	6	
実用漢方療法		2	10	4	6	3			2	6	
明解漢方処方	注17	2	10	4	6	3			2	6	*7
漢法の臨床と処方	注18	2	5	5	8		3		2	2	

\*1 一般にはこのまま一緒に煎じているが、傷寒論では、水600ccに玄米以外の諸薬を入れ、煮て400ccとし、滓を去ってから玄米を入れ、再び火にかけ、米が煮えたら米を去り、3回に分けて温服するのが本当のやり方である。

\*2 右七味、水約二合を以て、六味を煮て一合二勺程となし、滓を去り、粳米を入れ、再び煮て六勺程となし、粳米を去って一回に温服する(通常一日二、三回)。

\*3 水400を以て玄米以外の薬を煮て240に煮つめ、滓を去り、玄米を加えて煮直し、玄米が煮えた頃火から下して3回に分服。便法:常煎法

\*4 右七味、以水一升、煮取六升、去滓、内粳米、煮米熟、湯成去米、温服一升、日三服。

\*5 右七味、水二合を以て、先づ六味を煮て一合二勺を取り、滓を去り、後粳米を入れ、煮て六勺と為し、米を去りて一回に温服す(通常一日二、三回)。

\*6 右七味を水二合を以て煮て一合二勺なし、滓を去り粳米を内れ、再び煮て米熟したらば米を去り二勺を温服す。一日三回。

\*7 浅田流では杏仁4を加える。新しい竹葉なきときは竹茹を代用する。

## 注1

- ・体力が衰え、皮膚、粘膜は乾燥して滋潤に乏しく、口舌は乾燥して、口渴を訴えるものを目標とする。
- ・肺炎、麻疹、流行性感冒などで、回復期になって、なお余熱が去らず、咳嗽、口渴、多汗、盗汗などのあるものに用いる。
- ・肺結核、糖尿病にも用いることがある。

## 注2

- ・麦門冬湯の証に似て、口渴、口乾のあるもの。熱性病が長びいて熱が少し残り、痰が多く咳が激しく呼吸浅表となり、心下部が痞えて嘔吐することがあるもの。
- ・睡眠不良で夢の多いもの、口舌乾燥し、食欲不振、ね汗などがあり、瘦せて身体乾燥し皮膚が乾燥する傾向があり、肌が熱く触れることがある。
- ・感冒が長びいたもの、流行性感冒、気管支炎、肺炎、気管支喘息、麻疹などで咳嗽激しく呼吸困難のあるものや、肺結核、糖尿病で微熱、口渴のあるものなど。

注3

- ・大熱が去って余熱が残り、熱が内部にひそんで津液乾燥のものに用いられ、陽証でしかも虚証のものによい。
- ・主として呼吸器疾患に用いられることが多く、流感・肺炎・気管支炎・麻疹・百日咳・気管支喘息・肺気腫・肺壞疽・肺結核等で、呼吸困難・口渴・動悸などを主訴とするものに用いられる。また糖尿病・尿崩症等で疲労口渴のあるもの、日射病で口渴・呼吸困難のあるもの、心臓脚気・嘔吐・脳溢血等で顔面紅潮し、口渴があつて呼吸促迫のものなどに応用される。また盗汗・不眠症・脳症・吃逆・咯血・衄血などに用いられることがある。
- ・熱性病で大熱がおおむねとれた後、余熱が去らず、熱が内に潜んでいるので、体液が枯れて皮膚乾燥し、体力は衰え、熱気が胸に上って逆上感があり、胸中煩悶を訴え、呼吸促迫し、口渴き、あるいは嘔吐を發するものを目標とする。

注4

- ・差後勞復病：大熱が解して後、余熱は消散せずして、主として裏に伏し、津液は枯竭し、身体は乾燥し、虚羸、少氣し、虚熱が上逆して煩悶を發し、時々吐せんとする状ある等の證に対する薬方であつて、主として余熱を解し、内を滋潤し、虚羸、少氣、上逆、煩悶等を治するの能を有する。

注5

- ・麦門冬湯証に似ていて、体力が衰え、皮膚・粘膜が乾燥して滋潤に乏しく、口舌が乾燥して、口渴のあるもの。
- ・肺炎、麻疹、インフルエンザなどの回復期で、熱が残り、咳嗽、口渴、多汗、盗汗などのあるもの。肺結核、糖尿病。

注6

- ・鼻がふさがって頭痛するものに用いる。(有持桂里)
- ・白虎加人參湯を用いるような患者よりも、一段と体力が虚して、体液を失い、滋潤を必要とするものに用いる。
- ・肺炎、麻疹、インフルエンザなどで、高熱が下つてのち、口渴を訴えるものに、この方の証がある。
- ・麦門冬湯の証に似て、咳嗽は軽く、熱性症状のあるものに用いる。
- ・麻疹、肺炎、肺結核などに用いる機会がある。
- ・熱が永びき、白虎加人參湯を用いる患者よりも、一段と虚弱になっているものに用いる。また麻疹、肺炎などで高熱が一応下つて余熱の去らない時にも用いる。

注7

- ・せき：麦門冬湯を用いるような場合で、熱があつて、のどがかわくものに用いる。麻疹(はしか)、肺炎などに用いる機会もある。
- ・熱があり、のどがかわき、たんのからまるせきが出るもの。
- ・はしか(麻疹)、気管支炎、肺結核、感冒、肺炎

注8

- ・麦門冬湯の証のようで、しかも口舌の乾燥するものに用いるものである。流感で気管支炎を合併したとき、肺炎を併發したときなどに用いられるもので、余熱が去らず、咳嗽、口渴、多汗、身体乾燥などの症状のあるときによい。

注9

- ・虚羸少氣、氣逆、或は口渴
- ・流感、肺炎、肺気腫、糖尿病、心臓喘息

注10

- ・急性肺炎：手こずった重症のものが多い。その時は呼吸促迫を目標にして竹葉石膏湯を使う。
- ・発熱、咳嗽、呼吸困難、口渴が著明なもので、小青竜湯や小柴胡湯を用いても治らぬもの、或は発病後数日たって疲労の気味があり発熱と呼吸困難が目立っている定型的な肺炎症状に使う。
- ・呼吸困難の状態を治す。胸満感、呼吸促迫、口渴、等の症状を呈する。熱は不定。
- ・脈 浮数で弱いことが多い
- ・肺炎、肺気腫、肺結核、糖尿病
- ・熱のために水分が欠乏し、虚に傾き、熱のために起った気の上衝が虚性に現われるというのが本旨である。気の上衝の症状は呼吸促迫として現われ、はっはっと思が切れて苦しうだ。之を漢方では虚羸少気、氣逆と表現している。息が切れるから口が乾く、それはまた水分欠乏にもよる。口が乾くのは主ではなく従であって、この点は白虎加人參湯と逆である。
- ・白虎加人參湯は熱が主で煩渴を起し、竹葉石膏湯は氣逆が主で少気を起す。
- ・白虎加人參湯は熱が強いから脈が洪大になるが、竹葉石膏湯の方は虚に傾いているからただ浮だけか大だけかである。
- ・肺炎で高熱、少しく衰弱が加わり皮膚乾燥の気味があり、咳痰もあるがさほど劇しくはなく、それよりも呼吸促迫、若しくは呼吸困難の徴があり、唇赤く乾き、口中舌も乾燥する気味があり、常に口を湿していたい感じがするものに使う。

注11

- ・肺炎・麻疹・百日咳・気管支喘息・肺気腫・肺結核等で呼吸が浅く速く息が苦しいもの或は発熱口渴咯血動悸等を伴うこともある。
- ・日射病で口渴息切れするもの。
- ・心臓脚気で息が切れ動悸がし口渴して疲労気味のもの。
- ・糖尿病で疲労気味で口渴があるもの。
- ・嘔吐下痢し煩渴或は身熱があるもの。
- ・ひきつけ・脳症で高熱搐搦口渴呼吸促迫等があるもの。
- ・鼻血で渴するものに使った例がある。

注12

- ・瘦せ型の人、皮膚乾燥、舌乾燥、口渴、冷水を好む、食欲不振、疲労し易い、不眠、呼吸困難、嘔吐感、多汗、顔面紅潮。
- ・糖尿病、鼻炎、流感、肺炎、高熱病後の衰弱、日射病、肺気腫、喘息。
- ・気管支炎：咳込んで顔面紅潮し、ときには嘔吐を催すような痙攣性乾性の咳には麦門冬湯、これに類似した症状で熱、口渴のあるとき。
- ・肺炎：小児の肺炎で熱が続く咳が止まらないとき。
- ・糖尿病：皮膚に艶がなくかさかさして、目まいなどを訴える人。
- ・麻疹：発疹した後も高熱が続く、口渴打がって譫語をいうようなとき。

注13

- ・気管支が弱い：麦門冬湯を用いるような場合で、熱があつて口のかわきがあるのに使用する。肺炎などに用いることもある。
- ・気管支炎、肺炎、ゼンソク、肺気腫、糖尿病

注14

- ・熱性病、上逆し、喘咳し、食欲減退して口渴甚しく、精力衰憊し、脈数にして弱なる証。
- ・熱性病、皮膚乾燥して肌熱退かず、咳嗽、喀痰ありて煩悶する証。
- ・吐瀉病にして、吐瀉漸やく止み、煩躁、口渴して頻りに水を欲し、或は乾嘔し、或は呼吸困難を現はし、或は吃逆を發し、精力著しく衰へ、脈数にして弱なる証。
- ・肺結核、及び其の類似疾患にして、肌熱灼くが如く、或は煩渴甚しき証。
- ・糖尿病、或は尿崩症等。
- ・肺結核の一証にして、漸やく衰憊し、胸満、乾嘔し、日晡潮熱し、心氣亢進ありて煩悶し、乾咳頻りにして盗汗あり、咽乾口燥し、大便軟瀉し、尿利減少し、面に血色なく、氣力困憊し、他薬の応じ難き者。

注15

- ・熱ある病が汗が出て一旦熱がとれた後身体疲れ息づかひも弱く時々のだむせっぽく吐きそうになる者。汗を發し汗い出でたるも内の熱とれず病人甚だ熱がり胸中もだえ咳の劇しき者等にも宜し。本方は使ひ道甚だ多し。

注16

- ・気管支炎、肺炎、喘息、肺気腫、糖尿病



注17

- ・外観瘦型、皮膚乾燥、舌乾燥、口渇、疲労感、不眠、微熱。
- ・呼吸困難、嘔吐、多汗、盗汗、空咳、冷水を好む、尿色赤い、顔面紅潮、食欲不振。
- ・麦門冬湯証(体液喪失して、のぼせる症)に胸部の熱(石膏の証)を帯びたもので、同じく体液欠乏により舌証も皮膚も乾燥状態にある。
- ・高熱病解熱後の衰弱、糖尿病、鼻つまり(上逆の一証)、日射病。

注18

- ・カタル性肺炎

処方番号：167

処方名：八味地黄丸（はちみじおうがん）

**処方構成：**

地黄 5-6, 6-8、山茱萸 3, 3-4、山薬 3, 3-4、沢瀉 3, 3、茯苓 3, 3、牡丹皮 3, 3、桂枝 1, 1、  
加工ブシ 0.5-1, 0.5-1 （成分および分量中、左側の数字は湯 右側は散）

**用法・用量：**

（１）散：１回 2g １日 3 回

（２）湯

**しばり：**

体力中等度以下から虚弱で、疲れやすく、四肢が冷えやすく、尿量減少又は多尿でときに口渴があるものの次の諸症

**効能・効果：**

下肢痛、腰痛、しびれ、高齢者のかすみ目、かゆみ、排尿困難、夜間尿、頻尿、むくみ、高血圧に伴う随伴症状の改善（肩こり、頭重、耳鳴り）、尿漏れ

原典：金匱要略

出典：

**解説：**

別名 腎気丸、八味腎気丸、崔氏腎気丸

腎の機能の衰微を目標にして用いる、いわゆる腎虚の方剤である。

幼少年に用いること少なく、いわゆる老人病の薬方ともいうべきもので中年以後高齢者に用いる。平素胃腸虚弱で下痢の傾向のあるものや、胃内停水のあるもの、嘔吐悪心のあるものは禁忌のことが多い。すなわち、本方を服して後、往々食欲減退を訴えるものがある。かかる場合は本方の適応症であるから転方すべきである。

本方と牛車腎気丸（167A）・六味丸（167B）との鑑別は、本方と牛車腎気丸には冷え、六味丸にはほてりがあることである。牛車腎気丸には水分の貯留傾向があり、そのためむくみを示す。六味丸は水分の不足があり、そのため皮膚は乾燥傾向を示す。

# 167.八味地黄丸

参考文献名		地黄	山茱萸	山藥	沢瀉	茯苓	牡丹皮	桂枝	附子	薯蕷	乾地黄	炮附子	山茱萸肉	用法・用量
処方分量集		料 5	3	-	3	3	3	1	1	3		-	-	
診療の実際	注1	丸 8分	4分	-	3分	3分	3分	1分	1分	4分		-	-	*1
診療医典	注2	湯	3	3	3	3	3	1	1	-	5	-	-	*2
症候別治療		丸	4分	4分	3分	3分	3分	1分	1分	-	8分	-	-	*3
処方解説	注3	湯	3	3	3	3	3	1	1	-	5	-	-	
後世要方解説		丸	4分	4分	3分	3分	3分	1分	1分	-	8分	-	-	*4
漢方百話		煎	3	3	3	3	3	1	1	-	-	-	-	
応用の実際	注4	丸	4	4	3	3	3	1	1	-	-	-	-	*5
明解処方	注5	料	3	3	3	3	3	1	0.5	-	5	-	-	
EBM漢方		丸	4	4	3		3	1	-	-	8	1		*6
			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*7

\*1 練蜜にて丸とし、1回量2を服し、1日3回

\*2 練蜜で丸とする。1日3回、2ずつ

\*3\*6 練蜜で丸とする。1日3回、2ずつ服用

\*4 料として煎じて用いる場合は、法の如く煎じて用いる

\*5 混和末とし、蜂蜜で練り、梧子大の丸(1個約0.2)とし、1日2回、15丸ずつ酒で服用する。漸次増量して25丸とする。

\*7 附子を除く七味を粉末とし、附子は細刻して水で濃煎し、エキス状となし、粉末と蜂蜜を混じて丸剤に造る。1回2ずつ、1日3回服用

〔注1〕 疲労倦怠感が強いもので胃腸の丈夫なもの。

老人の腰痛、糖尿病、慢性腎炎、萎縮腎、脳溢血、動脈硬化症、膀胱炎、陰萎、前立腺肥大、産後及び婦人科の手術後にくる尿閉、脚気。

〔注2〕 下半身の疲労脱力、多尿、頻尿、尿利減少、尿の淋瀝腰痛のあるもの。

膀胱炎、前立腺肥大、腎炎、腎硬化症、高血圧症、糖尿病、脳出血、陰萎、尿崩症、腰痛、坐骨神経痛、産後または婦人科手術後にくる尿閉または尿失禁、脚気、遺尿症、白内障など。

〔注3〕 中年以後高齢者に用いることが多い。

腎臓疾患（腎炎、ネフローゼ、腎臓結石、萎縮腎、腎盂炎、蛋白尿、産後の浮腫等で利尿減少）、口渇、腰痛等のあるもの。

膀胱炎、老人性膀胱萎縮、膀胱結石、膀胱括約筋麻痺、前立腺肥大症、尿閉、尿失禁、夜尿症等で小便不利あるいは自利、あるいは尿閉、あるいは失禁し、口渇、腰痛、血尿等のあるもの。

脳出血、動脈硬化症、高血圧症、低血圧症で口渇・小便不利あるいは自利夜尿、煩熱、腰痛、小腹不仁等のあるもの。

糖尿病、尿崩症、腰痛、坐骨神経痛、椎間板ヘルニア、腰脚の麻痺、下肢麻痺、脚気、神経衰弱、ノイローゼ、白内障など。

〔注4〕 胃が健全で食欲正常，下痢，嘔吐などなく，泌尿器，生殖器の機能が衰え，疲れ易く，腰や足が冷えたり痛むもの。老人性腰痛，ぎっくり腰，高血圧症，動脈硬化症，脳溢血後遺症，腎硬化症，前立腺肥大，慢性腎炎，腎臓結石，糖尿病，夜尿症，産後の尿閉，脚気。

〔注5〕 必須目標：①口渇，②尿量異常（減少または増大），③尿量増大するときは排尿回数多い，④尿量減少するときは下肢浮腫あり，⑤下腹部麻痺又は下部直腹筋緊張，⑥手掌足心熱感または冷感，⑦性欲減退，⑧腰痛，⑨消化器障害なし（下痢，嘔吐，食欲不振など），⑩倦怠感。